

たかすぎしんさく
高杉晋作(1839-1867)

1. 「高杉晋作」という人物

高杉晋作は実に破天荒な人物として今日まで言い伝えられている。幕末という激動の時代の中で波乱に満ちた人生を送った彼は、奇想天外な行動と思考で周囲のだけでなく外国の人々にも衝撃を与えた。しかし、その豪快で突飛な行動をする高杉は、昔だけでなく今も多くの人から尊敬されている。



高杉晋作



中央の人物が高杉晋作

2. 私が「高杉晋作」を選んだ理由

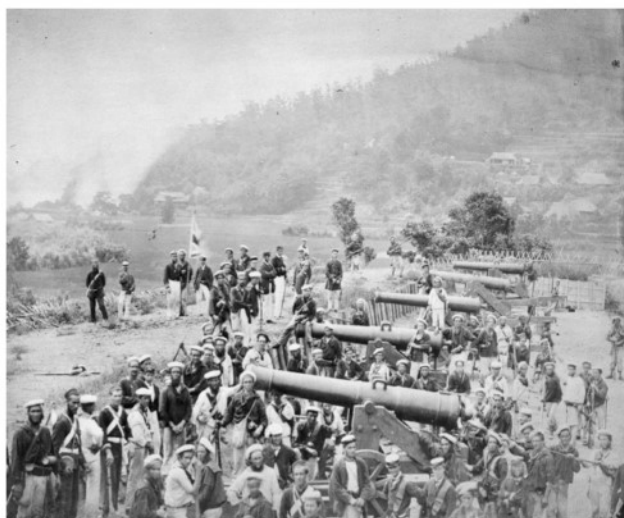
2015年、NHKの大河ドラマ「花燃ゆ」が放送された。母が主人公の兄である吉田松陰に魅せられていたが、私はその松陰の教え子である高杉晋作に魅力を感じた。彼の猛々しい行動と斬新かつ緻密に計算された考えはとても印象的だった。しかし当時の私は、まだ幕末のことを完全には理解できていなかった。調べる人物を選ぶとき、吉田松陰か高杉晋作かで悩んだが、ふと頭の中をよぎったのは大河ドラマ「花燃ゆ」に出てくる高杉晋作だった。常に新しいことを求める姿勢を思い出し、彼がどのような人生を歩んだのか気になった。

3. 「高杉晋作」の生涯

高杉は1839年、長州藩（山口県）の藩士の長男として生まれた。19歳のとき、後に高杉の生涯の師となる吉田松陰が主宰する”松下村塾”に盟友・久坂玄瑞（くさか げんずい）の誘いで入塾。優秀で将来有望な人材、「松下村塾四天王」の一人に選ばれるが数年後、安政の大獄で井伊直弼によって吉田松陰が処刑される。高杉は、幕府の使節団として24歳で上海に留学する。しかし、高杉が上海で見たものは、上海を我が物顔で歩く西洋人と歩いてくる西洋人に道を譲る清国人であった。高杉は列強による植民地化に恐怖を感じ、帰国後、尊王攘夷運動に参加し始めた。尊王攘夷運動はますます過激化し、高杉も建設中のイギリス大使館を焼き討ちにする。焼いたことで欧米の怒りを買うことを恐れた藩から謹慎を命じられるが突然、出家する。このときは長州藩は攘夷に消極的だったが、しばらくして攘夷運動が過激になった。

尊王攘夷運動が過激になった長州藩は、同じく運動を進める公家と京都にいる朝廷を動かし幕府に攘夷運動をすることを迫る。結果、幕府側が折れ、1863年の攘夷決行日（5月10日）、長州藩は

下関を通る外国船（アメリカ・フランス・オランダ）を砲撃した”長州藩外国船砲撃事件”。外国の反撃を懸念した長州藩は、出家していた高杉に下関の防衛強化を依頼する。そして、高杉は身分に囚われず誰でも兵士になれる”奇兵隊”を結成。初代総督に就任するも、藩との度重なる衝突ですぐに解任されてしまう。その後、高杉は藩に無許可で京都に行き脱藩の罪に問われ投獄される。しかし幕府は長州藩に対し討伐を開始”第一次長州討伐”。それと同時期、長州藩は長州藩外国船砲撃事件の報復として連合艦隊（アメリカ・フランス・オランダ・イギリス）からの攻撃を受け、下関砲台は占拠・破壊される”下関戦争”。長州藩は欧州の圧倒的な強さを前に攘夷が不可能だと悟り、倒幕へと方針を転換する。連合艦隊との講和のため長州藩は高杉と通訳として伊藤俊輔（後の伊藤博文）を派遣。長州藩から交渉の全権を委任された高杉は連合艦隊が提示したほとんどの諸条件はのんだが、彦島を租借するという条件だけは認めなかった。これは上海の留学で学んだ「欧州の支配下になることで何がどのようになるのか」ということを高杉は知っていたからである。結果、高杉は多額の賠償金を払うことになったが、長州藩は幕府に言われて攘夷を決行したという理由により賠償金は幕府が払うこととなった。一方、幕府による第一次長州征伐は長州藩が京都へ入り、それを薩摩・会津藩が撃退し降伏させた”禁門の変（蛤御門の変）”。この二年後の1866年1月、長州藩は薩摩藩と薩長同盟を結ぶ。



下関戦争で連合軍に砲台を占拠・破壊される



禁門の変（蛤御門の変）

連合軍との折り合いをつけた長州藩だったが、藩内では幕府に恭順な親幕府派が力をつけていた。倒幕を押し進める高杉は1865年、功山寺で親幕府派を倒すため挙兵するも、集まったのは80名あまりの兵だった。しかし、その後から志願兵や高杉に協力する者は増えていき、ついに高杉は親幕府派を撃破し藩政の主導権を取り戻した。長州藩はこれにより完全な倒幕派となった。

1866年6月、幕府は”第二次長州征伐”を宣言するが、これに薩長同盟で薩摩藩の支援を受けている長州藩は応戦する。薩摩藩がイギリスから輸入した最新鋭の武器を長州藩に流すことで長州藩は強くなり幕府はこれに苦戦を強いられる。また、高杉は藩から海軍総督を任されていたが、幕府に対抗するため藩に無断で軍艦を購入。その軍艦と奇抜な発想の戦術を使って幕府軍に勝利した。最新鋭の武器で戦う長州藩と旧式の武器で戦う幕府軍には、圧倒的な力の差がうまれ幕府軍は敗戦が続き、第二次長州藩征伐は第14代将軍・徳川家茂の急死により中止となった。これにより、一つの藩にすら幕府は勝てないほど衰退してしまっていることが明確になり、幕府の権威は完全に失墜した。

第二次長州征伐の最前線で戦い抜いた高杉の体は、既に結核に侵されており、1867年、療養するも病状が悪化し、27歳という若さで激動だった生涯を閉じた。高杉はその血気溢れる行動力と知性で日本の将来を導いた。しかし日本が大政奉還をして生まれ変わるその瞬間までは見れなかった。

【参考文献】

- ・黒田 日出男 『図説 日本史通覧』 帝国書院 2014 年
- ・君島和彦・加藤公明 『高校日本史 A 新訂版』 実教出版 2016 年
- ・日本史 A 授業プリント No.4-6

【参考 URL】

- ・ <https://bakumatsu.org/blog/2013/06/takasugi.html>
- ・ <https://historystyle.work/archives/875>
- ・ <https://rekisiru.com/2199>
- ・ https://news.biglobe.ne.jp/international/0610/jbp_190610_7090289390.html
- ・ <https://hitopedia.net/%e5%a5%87%e5%85%b5%e9%9a%8a/> ・
- ・ <https://pleasure-bit.com/899.html>
- ・ <http://www.takasugi-shinsaku.com/taka113.html>
- ・ <https://nihonshi.hatenablog.com/entry/takasugi-shinsaku>